ハタラクヒト＊ペディア22

<加藤喜代一 氏 >

田中永子

はじめに

はじめまして、田中コーチングの田中永子と申します。

私はＮＬＰやコーチング、ソースなどを学び、それらのノウハウや考え方を活かしたコーチングを提供しております。

この度、新しい企画といたしまして、おもに愛知県名古屋市、刈谷市を中心にお仕事をしていらっしゃる経営者の方々や企業や組織の幹部の方々へのインタビュー企画をスタートいたしました。

この企画を始めようと思った趣旨は、将来の先行きが見えづらい現代社会において、第一線でバリバリと働いていらっしゃる現役の経営者の方々、企業幹部の方々が、今何を考えているかということに興味を持ったこと。そして、その考え方に基づいてどんなアクションを起こしていらっしゃるのだろうと思ったことにあります。

また、こうした第一線でご活躍の方々のさまざまな角度からのメッセージを他の多くの実業家の方々と共有したいと思ったことも大きなモチベーションとなっています。

その他、高校生や大学生の方、これから社会に入っていこうとする方にも読みやすいように心配りをしておりますので、ぜひご愛読をいただけましたら幸いです。

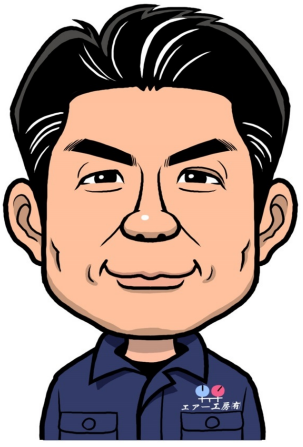
個人的な考えではありますが、愛知県はモノづくりの聖地であると考えております。このモノづくりの聖地である愛知県にあって、日夜、しのぎを削っていらっしゃる多くの企業人、組織人の生の声をお届けしたいと思っております。

よって、このサイトの大きな特徴として、インタビュー形式のログをそのまま読者のみなさまにお届けするというスタイルを取っています。インタビューさせていただく私と、インタビューを受けてくださる方の真剣勝負。
行間の中に潜む間も大切なメッセージだと考えております。

第22回は、
平成８年に独立創業のエアー工房有限会社の代表取締役でいらっしゃる 加藤喜代一さんです。
刈谷市を起点に主に大型（業務用）空調設備の販売・施工・メンテナンスを提供されております
。

エアー工房有限会社詳しくはホームページ会社案内をご覧ください。
おもに工場・店舗の空調設備を提供しており、会社のモットーは「清潔に勝る信頼なし。」。

加藤喜代一氏



趣味は何でも興味があるものは体験しないと気が済まないたち。
バイク、アウトドア、スキューバ、ゴルフ、ガーデニング、読書、散歩、マラソン
好きな本、最近は「穂村弘」 「青木薫（翻訳本）」 に夢中
好きな音楽は70～80年代洋楽
日頃はもっぱら通販宣伝のないＮＨＫ第一放送

連絡先：エアー工房有限会社
〒448-0013 愛知県刈谷市恩田町1丁目152番地1
TEL ： 0566-29-0610　FAX 0566-29-0854
メール： info@cocorothermo.com
HP　　： http://www.cocorothermo.com

◆法人成りと同時にもらい火で倉庫全焼

田中永子（以下、田中）：　今のお仕事は、喜代一さんから始められたの？

加藤喜代一さん（以下敬称略以下、加藤）：　そう。ぼくは創業者。

田中：　どうしてそういう系のお仕事を選ばれたんですか？

加藤：　ぼくは、高校を出てからすぐ『エアコン屋』になったんですよ。話すと長いんですけど、親違うので、ぼく。その人の紹介で、エアコンメーカーの『ダイキン』ってあるでしょ？

田中：　ええ。

加藤：　そこに、高卒で、コネで入ったのね。

田中：　うん。

加藤：　そこに１０年ぐらいおったかな。平成８年に独立したので。

田中：　えっと、今は平成２６年なので。

加藤：　そんなにやったんだね。お姉ちゃんが生まれた時に独立しているので。１８年、１８年だね。１０年サラリーマンやって。

田中：　へぇぇ。

加藤：　法人になったのは･･･平成１８年。法人成りした時に、ちょうど火事になったんですよ。

田中：　ええっ？？

加藤：　３月１４日。しゃべること、いっぱいあるんだけど（笑）　法人成りしたの。３月１４日が設立記念日で、これ結婚記念日でもある。

田中：　うん！

加藤：　だけど、３月１３日に火災に遭ってるんですね、もらい火で。倉庫が全部燃えちゃった。

田中：　設立の前の日に？

加藤：　そう。おもしろいでしょ？　だからゼロからやり直すしかないって意味ですよ。

田中：　すごいね。

加藤：　うん。また年数はメールするわ。後で加筆しといて。

田中：　うん（笑）　でも、大変じゃなかった？

加藤：　うん。大変だった。前のインタビューの人も家の火災の話しがあったでしょ？　ぼくの場合は会社だから、また賃貸のところだから別に問題はなくって。大体エアコンつける道具とかはさ、車に載ってんのよ。みんな車に乗って帰るじゃん。だから次の日全部仕事は出来たのね。

田中：　よかったですね。

加藤：　そうそう。後パソコンやなんやのデータはみんな飛んじゃったけど。

田中：　あー。

加藤：　二つ並びの建物で、ひとつが『体操クラブ』だったの。隣がうちで。体操クラブだからウレタンとかいっぱいあるじゃん。クッションとか。たぶん、火ぃつけられたんだと思うけど。

田中：　え？？　放火なの？

加藤：　放火だと思うのね。そういう噂は後で聞いたんだけど。

田中：　わ。

加藤：　で、ウレタンがあるから馬鹿みたいに燃えたのよ。これほんとに夜１１時～１２時の夜中でしたね。３月だからまだ寒くて、ぼく、爆睡してたんだけど携帯見たら着歴がいっぱいになってて。

田中：　うん。

加藤：　最終的には家の電話が鳴って、セコムから「火報が鳴ってるから」っていうことでぶっ

飛んで行ったのね。で、現場着いて、とりあえずは「うちが火元じゃないじゃん」ってわかって、なぜか安心しちゃった。「あー、よかった」って思って。

田中：　うん。

加藤：　もうその後は朝まで消火活動ずっと見とったぐらい。新聞載ったぐらいですから。

田中：　結構大きな火事だったんですね。

加藤：　うん。ボーボーだった。鉄骨が全部曲がってぺっちゃんこになるぐらいだった。

田中：　すごいね。

加藤：　（建物の）中のもの、機器本体はメーカーの保険入ってたからいいんだけど。高い工具類とかその辺、材料からなにからなにまで、銅管も買いだめしとるのも全部燃えた。で、火災保険入ってなかったから、なんともならんかった。入ってたら、ぼくちょっと火事太りしてたと思う。それからは、もうね、保険、腹いっぱい入ってる。だからたぶん火事起きないと思う。

田中：　そうだね。大体準備してない時に限って。

加藤：　そうなの。おふくろも車両保険外したら、事故るとか。そんなんばっか。

田中：　法人化する前に。

加藤：　そう。この日は結婚記念日だし、ホワイトデーだし。とある先生に聞いたら「この辺の日取りがいいんじゃないか」っていうことで。けど、おもしろかったね。後々考えればね、「すげぇな」って。

田中：　すごいタイミング。イチからのスタートって感じ。

加藤：　「イチからやれよ」って（笑）「はいはい」って。

田中：　やだけどね（笑）

加藤：　この時は従業員が３人、ぼく入れて４人でやってて。火が出た瞬間に賃貸契約って消滅するの。だから、とにかく場所を探して。で、今のところなんだけどね……これ、めちゃくちゃにしゃべっても、後できれいに直してくれるんでしょ？

田中：　ううん、直さない。このまんま（笑）

加藤：　はははは。この倉庫もいわくつきでさ。前は隣が体操クラブだったでしょ、今度引っ越したところは、隣が「ダンスホール。」

田中：　身体使うところばっかり（笑）

加藤：　んで、ここはふたつ前の借主さんかな……が死んでるのよ。

田中：　え？

加藤：　自殺してるのよ。だから空いてたのか分からないけど。

田中：　それは後で知ったの？

加藤：　知ってた。っていうか、死んだ人も知ってたし。まぁ、いいやって。

田中：　ふぅん。

加藤：　死んだ人は怖くないので。おばけとか。

田中：　ほんとう？

加藤：　だって生きてる人の方が怖いじゃん。殺されちゃったり。ひとりで夜中いると、ちょっと怖いけどね（笑）ゾクゾクって。

田中：　そういう時って、いるらしいよ（笑）

加藤：　ふふふ。

田中：　そこからずっと変わられてない？

加藤：　変わってない。何年かして大家さんが、ぼくの知らないところでうちの倉庫を売りに出してたの。知合いの不動産屋さんから「加藤君のところ、売りに出されてるから買っちゃいなよ」って、「えー、そんな金ねーし」って。

田中：　うん。

加藤：　でもうまいこと買えたので。銀行さんがお金貸してくれたので、買いました。これ、今エアー工房さんのものです。法人さんのもので、ぼくのものじゃないです。

田中：　うん。

加藤：　買う時もおもしろい話があって。ここ全部で２００坪あるんですよ。そこを分筆予定で買うことになって、最初手付でいくらか払うわね。

田中：　ええ。

加藤：　たしか３月末ぐらいに手付払って。そしたら４月１日に区画整理が入ったの。で「９月まで分筆が出来ないよ」って、凍結されるのね。

田中：　あー。

加藤：　その間は、「番地が決まるまではそういったことは一切ご遠慮ください」って。「手付金払ったのに、俺のものにならんかも」ということで９月まで不動産屋さんとすったもんだして家賃払わなかったりだとか。

田中：　笑

加藤：　そこだけは強気になれた。その間にぼくが死んだら、手付がパーになるでしょ？　そういうのもいろいろあって、すごくごねた。

田中：　すごく頑張った。

加藤：　頑張った。

田中：　うん。いわく物件になっちゃうし。

加藤：　うん。二ヶ前は言わなくていいんだけどね。一ヶ前は言わんといかんけど。まぁ、土地建物で考えれば安いかなって。会社辞める時、「これ売っちゃえばいいな」って。

田中：　辞めないでしょ（笑）

・・・・・・　つづく＾＾

◆サービスマンではなくて工事屋で独立

加藤：　いやいやいや。ぼくは辞める気満々ですから。

田中：　そうなの？

加藤：　うん。倅にも継がせたくないし。ぼくの代で終りでいいですよ。

田中：　へぇ。辞めてなにする、とかあるんですか？

加藤：　定年ないからね、とりあえず。

田中：　でしょ？

加藤：　飽きたら、辞めるだろうなぁ。なんか違う事やってると思うな。一生この商売やってないと思う。

田中：　どんなことやりたい、とか？

加藤：　ぼくね、働きたくなんですよ。

田中：　あはははは。真面目な顔して言わないでください（笑）

加藤：　ほんと働きたくないんで（笑）　今、家電商品買うと、延長保証とかあるでしょ？

田中：　ありますね。

加藤：　それの元請けをやりたい。エアコンだけでいいから、小銭を集めて「修理だよ」って言ったらお金を払って。ぼくずっと前から考えてて、東京のそういう本社にも行ったことがあって「ぼくにやらせてください」って言ったら「アホか」って言われたけどね。何百社と集めないと出来ないから。楽な商売で、地震、天災関係ないでしょ。それにそうそう壊れないですよ。

田中：　壊れないんだったら、オーダーも入らないんじゃないの？

加藤：　それが売る時、上手いこと言って。保証期間延長とかさ、店行って勧められるでしょ？　ぼく絶対入らないけど（笑）

田中：　あれはお得ではないの？

加藤：　お得じゃないね。まず１年間はまずメーカー保証でタダでしょ？

田中：　うん。

加藤：　その入ってきたお金は、１年間プール出来るわけですよ。だからそれを毎年繰り返していけば、次の年全部壊れたって。それはまずないからね。それ一番思ってる事かな。いろいろノートにも書いて。なんとかならんかなって。

田中：　うん。

加藤：　そしたら事務所でずっと遊んどれるでしょ？

田中：　なにして遊んでるんですか？

加藤：　あー。

田中：　フリーになったら、なにをしたいの？（笑）　仕事したくないって言ってたけど。

加藤：　なんだろねぇ。あの、これ書いちゃダメですよ。大社長がおるんですよ。その人とずっと遊んどるかもしれんね。

田中：　大社長？

加藤：　その人もう働いてないんで……。

田中：　大社長って、なに？

加藤：　大社長と言ってもそんな一流企業の社長とかではないんだけど。

田中：　その……『遊んでるように見えるだけ』ではなくって？

加藤：　違う（笑）　実際遊んでる。夏でもずっと「加藤、行くぞ」って言っていろいろ遊んでましたよ。

田中：　連れ出されちゃう？

加藤：　そうそう。でも「一週間全部遊べ」って言われたら無理かもしれんね。仕事があって、さぼってる感があって気持ちがいいのかも。

田中：　そんな気もするね。制限があるから、自由さに憧れるというか。

加藤：　そうかもしれんね。みんなから見れば、結構自由な方だと思うけどね。

田中：　うん。自由な感じ、するよ。

加藤：　もうサラリーマンも戻れんしね。

田中：　そもそもなんでエアコン屋さんなの？　他にもいろいろあるように思うけど。

加藤：　だってコネだもんで。その人に「なんとかしてくれ」って。もうコネありきで。

田中：　あー。最初からコネで。そのつもりで。

加藤：　そうそう。一応高３の時、大学行くつもりで夏休みまで勉強してたんだけど。

田中：　うん。

加藤：　「やーめた」って。「やっぱ働くわ」ってことで紹介してもらった。

田中：　へぇ。

加藤：　だから今のぼくがあるのは、そこなんだけど。高卒だから営業とかはやらせてもらえないわけよ。

田中：　そうなの？

加藤：　サービスマンでね、修理やる方。今の技術が身についたのも、それのおかげだと思うね。それにぼく、昔からおしゃべりだもんで「おまえ、外に出なくていいから電話番やれ」って言われて。会社入って３年ぐらいは外だったけど、そっからずっと受付やらされた。クレーム処理班でね。

田中：　わ。

加藤：　夏とかでも１０００本くらい電話受けて。それで人としゃべるのが嫌いになったぐらい。昔N〇Cとかで会社に火をつけたヤツおったけど、よーくわかるもん。

田中：　ふふふふ。

加藤：　こんな会社なくなればいいのにーって。

田中：　こんな仕事やらせやがってって（笑）

加藤：　そうそう。「阿呆だ」「たわけだ」は言われまくるし「すぐ来い」とか、そんなんずっとやっとった。

田中：　何年ぐらい？

加藤：　簡易年表でいくと、２１歳から独立するまで。フロント業務っていうんですけど、ほんと嫌だったなぁ。

田中：　ひどいクレームとかもあったの？

加藤：　うん。「たまご冷やしてたエアコンが壊れたから孵化しちゃう」とか。８９３とか。なにせみんな暑くなると、怒るの。直して欲しくてしょうがないから。「死んじゃうわ！」ぐらいのことを言われる。

田中：　あはははは。

加藤：　死ねばいい（笑）　まぁ、クレームの電話ってわかってるから、とりたくないじゃない。

田中：　うん。

加藤：　でもしょうがないし。だから家帰ったら、ひとこともしゃべらんとか平気でありましたよ。

田中：　うん。

加藤：　ちょっと暑くなるとそれに比例して電話増えるから、暑くなってくると憂鬱になって

くる。たぶん鬱だったかもしれん。

田中：　ちょっと想像できない。

加藤：　でしょ？　みんなそう言う。「これ、鬱っていうんだな」っていうのが２回ぐらいある。

田中：　気分が沈んじゃう。

加藤：　うん。でもその頃はそんなことは言ってなかったよ。世間も。「鬱だ」「過労死」とかも。そんな時代じゃなかったな。

田中：　最近はちょっと敏感かも。

加藤：　うん。敏感すぎるでしょ。だって当時ぼく、夜８時ぐらいまで受け付けやって、そこから修理に行くとかあったもんね。業者さんもサービスマンもこなしきれないから。過労死もくそもないよ。

田中：　暑いよね。エアコンのお仕事って屋外が多くないですか？

加藤：　そうそうそう。屋外でしょ。それに壊れてるから、涼しくなったら帰らなきゃいけない。冬はあったかくなったら帰らなきゃいけない。

田中：　きつい仕事。

加藤：　まぁ、けど、ひとところで仕事するわけじゃなくって、いろんなところ行けるから、それはそれで楽しかったけどね。

田中：　どうして辞めなかったの？

加藤：　あー、なんでだろうねぇ。いろいろあったのよ。

田中：　うん。

加藤：　今でいうヘッドハンティング？　独立してサービスやってる人が「うちこないか」とかあったんだけど。なんか、嫌だったなぁ。

田中：　うん。

加藤：　なんだかんだ言ってたら、会社が「独立を応援します」って。要するにリストラなんだけど。修理をメーカーが全部一括でやるようになって、サービス課っていうのは要らなくなったから。「サービスマンとして独立するなら、お金とか道具とか支援しますよ」って早期退職者を募ったんです。

田中：　うん。

加藤：　待ってたから、そういう時が来たのかもしれない。で、その時にぼくはへそ曲がりだもんで、サービスマンじゃなくて工事屋さんやるって。ぼくだけだった。後は先輩たちみんなサービスマン。

田中：　うん。

加藤：　だって自分で金額決められない商売なんて、「絶対やだね」って思って。

田中：　たしかに。

加藤：　うん。修理しても、メーカーから点数でいくらって決まってるし。で、（修理に）行ったらまず怒られるんですよ。で、直らんかったら、もっと怒られるでしょ。

田中：　ふふふふ。

加藤：　そんな商売、絶対やだったから。それで工事屋さん。取り付けの方ね。修理だと怒られるし、金額決められるし。メーカーのお抱えだからサラリーマンと変わらないんだよね。場所もどこにおるか把握されちゃうし、「その場で伝票つくってお客さんから徴収しなさいよ」って言われたりするしね。「そんなの、やだよー」って。

田中：　うん。

加藤：　案の定みんなぶーぶー言ってるよ。

田中：　先見の明があったね。

加藤：　あったねぇ。ただ単にサービスマンが嫌だったんだけど。

田中：　つながれてるのが、嫌なのかな。

加藤：　そうだね。それよりもちょくちょくバイトしてたからかな、工事屋さんのとこ行って。いろいろ行ってたわ。で「エアコンってこんなに儲かるんだ」って思ったことあるもん。

田中：　うん。

加藤：　バブルの頃、儲かってたと思うんだよ。週３回ぐらいゴルフ連れてってもらった時とかあったから。バブリーだけど、入社したてのほやほやだから悪さ出来なかったね。

田中：　ふふふ。

加藤：　まだ社会人に成りきれてない頃だしね。

田中：　未成年だしね。

加藤：　そうだよね。でもそういうの関係なかったね。酒もたばこもやってたね（笑）　おもしろいね。今日ちょっと振り返りの日で行こう。

田中：　うん。

加藤：　アルバイトしつつ、エアコンのつけ方を覚えたしね。修理屋さんより自分で段取りも出来るってことで工事屋さんを選んだね。

田中：　ちゃんと外に目を向けてた時代なんだね。クレーム対応できついと言いつつも。

加藤：　うーん。いやぁ、あれは地獄のような時代だったね。今でこそ携帯で「〇〇さん」って出るじゃない。当時はそんなの出ないから、その時身につけたワザは、声で誰かわかるし、向こうで「こいつ寝そべってるな」とか、同じ人なら「風邪ひいてるの」とか周りの音も聞ける、全部わかっちゃうくらい、耳が鋭くなったね。

田中：　クレームって、同じ人がかけてくるの？

加藤：　お客さんをまとめてる販売店さんから来るとか。もちろん直接もあるけど、販売会社だったから、その下の取引会社とかからのクレームもあって、そういうところの担当者の声を聞けば全部誰かもわかる。

田中：　へぇぇ。

加藤：　やっぱりよく売ってくれるところは早く行かんといかんしね。そういう振り分けはしつつ、後は自分が夜に行くとか。

田中：　そこでなにを身につけたの？　その苦しい期間で。

加藤：　なんだろね。なんだろう。あー、理不尽さを我慢する心かな（笑）

田中：　本気で言ってる？（笑）

加藤：　ははははは。うん。でも理不尽さを悟るようになったのは最近だけどね、実際は。「もうしょうがない」って思えるようになったのは。

田中：　うん。

加藤：　その頃は毒づいていたから。若いからね。平気で思いついたことしゃべったりする人間だったと思うよ。

田中：　でも喜代一さんの電話対応、おもしろそうな気がする。

加藤：　そう。知ってる人はそうなるかもしれん。でも、こもったような声だし、電話だと聞き取りにくいんじゃないかなって思うけど。

田中：　ていうか、なんかね、リアクションがまっすぐ来ない感じがするの。

加藤：　あー、そうなのね（笑）　あはは。曲がってくるのね（笑）

田中：　うん。

加藤：　斜に。そうよ。そうよ（笑）

田中：　性格が曲がってるとか、斜に構えてるとか、そういうことじゃなくて。球筋がまっすぐじゃない感じがするの。

加藤：　素晴らしいねぇ（笑）　もう、それみんなに言われる。「なに言っとるかわからん」って。よく飲みに行くツレらにも言われる。最近は気をつけるようにはしてる。

田中：　気をつけてるの？

加藤：　うん。言いたいことがあったら、ちゃんとそれを「順番立ててしゃべらなきゃいけないなー」って気をつけてる。それとあんまりしゃべるのも、やめてる。最近聞く方に徹してる……ウソッ。

田中：　ふふふふ。

加藤：　まぁ『ガヤ（ちゃちゃ）』はあるけど（笑）　ガヤは言いたくてしょうがないんだよね。

田中：　そっちの方が向いてる感じがするんだけど。

加藤：　テレビに向かってのガヤも多いんだけど。ひとり遊びが好きなのね。

田中：　テレビに向かって、いろいろ言ってそうな気がする（笑）

加藤：　「あるわけねーだろ」とか（笑）　ずーっと言ってる。「芸能人がどうなろうと、俺関係ないしー」とか。平気でテレビとしゃべってる。

田中：　家族とかは？

加藤：　家族、みんな言ってるもん。「どうでもいいし」とか。だから伝染してるの（笑）　加藤家みんなB型なんで。全員てんでバラバラ。

田中：　あはははは。

加藤：　よくまとまってるなって思うもん。おばあちゃんもいて、だから５人いるの、B型。

田中：　すごいね。

加藤：　強烈よ。「ほいでね」って話し始めるけど「いや、全然ほいでね……の話じゃないし、続きになってないから」って。

田中：　あはははは。

加藤：　初めての話なのに「ほいでね」から始まっちゃう。なのにみんな「ふうん」って。思いついたことを順番にしゃべってて、「聞いてるの？」「うーん、聞いてる、聞いてる」って。

田中：　絶対聞いてない（笑）

加藤：　で、次の会話は全然違うの（笑）　それを一般の人にやると怒るの。もうこれぐらいの年になってくると。「大人なんだから、この人の結論を聞いてから、おまえ次しゃべれよ」ってそういうことをいまだに言われるの。

田中：　うん。

加藤：　「今その話題関係ないから」とか言われるから「そうだな。今まで結構自由にしゃべり過ぎたな」って。

田中：　おもしろいね。

加藤：　田中さんが言うように「斜から来る」っていうのは。「いっぺん、おまえ考えろよ」っていうのを、つくるね。

田中：　パッと見ストレートに来そうなんだけど、実はスライダーのような。

加藤：　そうね。いつからそんなひねくれちゃってるなんだろな。同じ人間だったら、嫌なやつだね（笑）

田中：　そんな、全然（笑）

加藤：　いや、おもしろい話をしてる時はいいんですよ。仕事とか、真剣な話になると、だぶんやだろうな。

田中：　うーん。そこに一種独特なユーモラスさがある感じがする。

加藤：　あはははは。うん。人が感じるところで、そうなんでしょうね。自分では評価できない。うーん、いやな奴だと思うけどな（笑）

田中：　ふふふ。そういったところがおもしろいというか。ユーモアとかウィットとか、お好きなんだろうなって。

加藤：　そうね。あるかもしれんね。

田中：　『時効警察』好きでしょ？

加藤：　『時効警察』好き。

田中：　ああいうのがおもしろいって思う人って、そういうのが好きな人だと思う。そういったものに引っかかるというのは、私の周りをみても、ちょっとイレギュラーな感じの人が多い（笑）

加藤：　うん、イレギュラーだと思うんだよね。

田中：　だから「おもしろいなぁ、喜代一さん」って思ってた。

加藤：　あ、そう？　ありがとう。そう思わせようとしゃべってるかもしれんけど。

田中：　いや、なんか元々がそうなんじゃないの？

加藤：　えーー（笑）

田中：　だから案外クレームの電話対応の時も、そんな感じだったんじゃないかなって思ったりしたの。

加藤：　そうね。その時全員に八方美人しなくちゃいけないのよ。もう百方美人ぐらい。「すぐ行きます」って言わなくちゃいけない。その中で怒ってる人には違う対応してたかもしれんね。

田中：　うん。

加藤：　今でこそ夏はたのしい季節だけど、この頃は地獄だったもん。あー、楽しい話いっぱいあるはずなんだけどなぁ。

田中：　思い出して（笑）　どういう感じで喜代一さんが形成されたのか、ちょっと知りたい感じ。

・・・・・・　つづく　^^

◆目指せ、９時５時男！

加藤：　俺の形成？

田中：　うん。

加藤：　長崎生まれじゃんね。対馬って島で生まれてるので。多分３歳で刈谷に来たんだね。親がデンソーに入ったから。で、なぜか刈谷と大府を行き来したのね。小１まで刈谷におって、小２から中２まで大府で、中３でまた刈谷に戻ってきた。で、高校でまた大府行って。小学校の引っ越しはそうでもなかったけど、中３の引っ越しはつらかったな。

田中：　結構大きいですよね。

加藤：　そうそう。おっきい。丸坊主にしないといけないから、刈谷の中学は。大府は長髪でよかったけどさ。で、たぶん親がこの辺で離婚してるので。

田中：　うん。

加藤：　だから引っ越しを２回、３回してるとこういう八方字美人が出来上がるんですよ。「みんなに好かれたい」っていうふうになっちゃうんですよ。「いじめられたくない」とか。

田中：　そんな弱い感じしないよね。

加藤：　うん（笑）　でかいから、みんなスポーツ出来るって勘違いするんだけれど、動体視力ポンコツなので、スポーツはだめ。損してるの、そこで。

田中：　バスケしてるって聞いた気がする。

加藤：　女房の前では言えないけれど、小学校の時はやってたね。学校の方針で高学年から課外授業のソフトボールがバスケに変わったんですよね。ぼくと同じ身長のやつがレギュラーでポストやって、ぼくは補欠でしたよ。

田中：　うん。

加藤：　中学校の時は陸上部でぼくより足の速いやつがいっぱいいたんで、砲丸投げをやったんです。高校はテニス部入って、お酒飲んで停学くらって部活がなくなりました（笑）

田中：　あはははは。なんかしでかしてますね。

加藤：　うん。ぼく高校２回停学くらって、後１回やったら退学でしたね。

田中：　なにしたの？

加藤：　お酒。キャプテン嫌いだったから呼ばずにみんなで集まって。たぶんキャプテンがチクったんですね。じゃなきゃバレるわけないもん。で、男子テニス部はなくなりました。後、原付。先生に見つかって免許取り上げられて。当時はまだヘルメットかぶらなくてよかったから、原付乗ってたらすぐバレちゃう。

田中：　お酒と原付で。

加藤：　そう。

田中：　全然おとなしくないじゃん。

加藤：　いやぁ、おとなしいっスよ。当然アルバイトも禁止だけど家の前のガソリンスタンドでバイトしてて。先生来るときは分かるから、その時は隠れて。

田中：　結構、叩けばほこりの出る感じだったのね。

加藤：　うーん。そんなの当時普通だったと思うよ。これぐらい。高校生なんて、傍から見ればすぐ分かるからさ。

田中：　ですね。

加藤：　中学、高校の時のツレが社長の倅だったりするのが、なぜかようけいたので。ぼくが創業した時も「会社の倉庫貸してやる。そこでやれ。」って、最初そこが始まりだったね。

田中：　いまだにその方たちとのつながりがあって。

加藤：　ある。でも１０人もいないよ、５人ぐらい。

田中：　いい人数ですね。集まりもしやすくて。

加藤：　そうね。コアで。多くて５人だね、長くつきあってるの。ひとりは建築屋の息子で、そ

ういうのがあったから、ぼく工事屋で最初スタートを切れた。その連れの親父も「会社にエアコンつけてくれよ」って、最初はそういうので回っていた。

田中：　うん。

加藤：　この辺は地域的に恵まれてるから。ぼく三重とか岐阜とかでこの商売やっても、たぶん続いてないと思う。地の利もあってね。なくならん商売でも、あるかな。

田中：　今エアコンのないところはないですもんね。

加藤：　ほんとは要らないんだけどね。昔は家にエアコンなかったでしょ。

田中：　でも、昔と今と暑さが違う気がするー。

加藤：　いやぁ、おれー緒だと思う。

田中：　違うよー。

加藤：　いやいや。アスファルトが増えたからだって。

田中：　そうなんだけど。昔って天気予報見てても３０度超えると「暑いね」。３３度だと「超暑いわー」ってそんな感じだったのに、最近は３５度とかさ。

加藤：　あるね。エアコンなんてみんな壊れちゃう、４０度近くいったら。

田中：　そういうものなの？

加藤：　壊れちゃうよー。汚れてたら一発で止まっちゃうし。

田中：　そういうのも保険で対応されるんでしょ？

加藤：　いや、そういう修理はお金出ないです。機械が壊れたら修理するけど、汚れによるものはダメだもんね。ほんとの機械的故障じゃないと。

田中：　そうじゃないと、請けない？

加藤：　請けない。

田中：　今も。

加藤：　今も、ですよ。

田中：　でも室外機って、どうしても汚れちゃうんじゃないの？

加藤：　汚い排風機のそばにあるとか、犬いっぱい飼ってて毛がつまるとか、そういうのは保険関係ないでしょ。でもそういうのはよくあるけどね。

田中：　うん。

加藤：　修理は緊急があるから、それが嫌で工事屋になったんだけど、修理はつきものだからね。

田中：　そうね。切り離すのは難しいですね。

加藤：　うん。だから土日も休みも関係なしなんですよ。それは嫌だなぁって思いはまだ引きずってる。

田中：　加藤さん、首に首輪がついてるのが、嫌な感じがする。

加藤：　そうなんですよ。ダラダラしとりたい。

田中：　散歩とかも、行きたいときに行きたいみたいな。

加藤：　そうそう。

田中：　だから修理のお電話とか、独立する時も出来るだけ首輪のない方を選んでる感じがする。

加藤：　はー。それはね、そうかもしれませんね。けど修理の電話はずっとあるからなぁ。

田中：　だから、辞めようとか思ってるんじゃないの？

加藤：　そうよ。その修理の首輪をちょっとでも遠ざけるために、保険の形にして。修理はメーカーの方に依頼した方が早く確実に直るわけだし、お金の問題さえなければお客さんは怒らな

いんで。今まで１８年ちょっとやってきた中で、自分が売ったやつ全部に保険かけておけば、誰かのが壊れたってまかなえるもんね。１回やってみようかな。

田中：　うん。

加藤：　１００台売って、１００台は壊れないので。「それ、やりたいな」って。で、事務所行ってポーとして帰る『９時５時男』が出来上がる（笑）

田中：　ふふふ。

加藤：　夏でも。６時半とかに家にいます。仕事したくないので。おかしいでしょ（笑）

田中：　あはははは。

加藤：　最近思ったんだけど、ぼく書斎ないなーって。でも考えてみたら、「事務所が書斎になってるな」って。だから家のたまりものは全部事務所に持ってってやってる。仕事が好きなんじゃなくて。

田中：　ひとりが好きなんじゃない？

加藤：　うん。ひとりの基地が好きなの。

田中：　基地なの？

加藤：　ここは基地なの。エアー工房さんの基地なの。事務所にいるといろんなセールスとか来るからさ、鬱陶しいんだけどね。時々電気消してたりして。

田中：　いないアピール？（笑）

加藤：　そう。

・・・・・・　つづく　^ ^

◆ふたりくぐったらやらないルール

田中：　喜代一さんの行動基準って、なに？

加藤：　なにそれ？

田中：　「～しよう」とか「～しようかな」っていう時に、それを決める基準。

加藤：　なんだろ……結構あっちもこっちも手を出す方なんで。

田中：　うん。

加藤：　一応「～したいな」っていうストックはあるので、「出来るな」と思えばやっちゃうんですけど。例えば庭いじりとか、金魚の水槽きれいにしようとか、バイクいじりたいなとか、そんなくだらないこと。人が日曜日にしか出来ないことを、平日にやりたいの、わざと。

田中：　わざと？

加藤：　わざと。映画見に行こうとか、思い立ったらすぐやりたいの。ホームセンター行って価格調べたり。ぼく足大きいから、あるものしか買えないのでスポーツ屋巡りはよくしてるね。結構ぷらーとしてるけど、修理の時だけちゃんとすれば、ぼくは仕事してることになるので、いいんです。

田中：　ぷ。

加藤：　よくやってけると思いますよ。まぁ夏は働いてるけどね。ルームエアコン取り付けなんて、一番儲からん仕事もしてるし。

田中：　どんな仕事が一番儲かるの？

加藤：　大きいエアコンつける、業務用の。店舗用のを一台ずつ替えていくとか。そういうのが一番いいかな。入れ替えが一番儲かるね。

田中：　新規より？

加藤：　うん。新規より入れ替え。会社始めて、いろいろやったんですよ。トヨタ自動車とかデンソーとかに入るとか、ハウスメーカーだとか、工務店さんの仕事だとか、いろいろ紙に書いて

。どれが一番儲かるかを全部紙に書出したことがあって。そしたら、入れ替えだったんですよ。で、これだけやろうって。まぁそれだけではないけれど「比率はそれにおこう」と思って。

田中：　へぇ。

加藤：　で、直接お客さんとやるのが利益率がいいでしょ？　そうすると修理も直接行かないといけないんだけど、それを入れたとしてもそっちの方がいいなって。それを徹底してやったんだよね。だから「ふたり（人を）くぐったら絶対やらない」ルールとか。

田中：　あー。

加藤：　間にふたり入ったら、もう無理だなって。意思の疎通もないし、俺のお客さんでもなんでもないし。自分のお客さんっていうのを増やしていく。

田中：　ですね。

加藤：　だからぼくがエアコン屋っていうのを知らない人も結構いるんで。

田中：　ふふふ。

加藤：　で、エアコン屋って知ると「家のやつをやってくれ」「いや、小さいのやりたくないんだけど」って。そういうのがある。

田中：　うーん。言わないようにしてるところもあるんじゃない？

加藤：　いやいや。あー、そうかもしれんね。だから知った人のだけ小さいのをやるけど、それでも増えてくるもんね、小さいのが。小さいのが大きいのにつながるかというと、つながらないので。

田中：　喜代一さんは、メモ魔？　さっきからいろいろ書いたりしてるけど。

加藤：　うん。メモ魔になった、最近。

田中：　最近なの？

加藤：　なった。大事な時は書くよ。書かないと分かんないもん。

田中：　大志朗さんもね、切り抜き帳とか見せてもらった。

加藤：　ぼくもそこまではないけど、ぼく今年から書くこと増やして。昼食ったのと夜食ったのとか。あと今年ゴルフ手帳つくったね。

田中：　どれぐらいで回ったとか？

加藤：　そうそう。感想と。次に行った時、必ず忘れてるのよ、前の時の課題を。誰と行ったか、スコアと天気と。それを書くようにしてる。そしたら、いいもん。「そうそう」って思う時があるもん。だから作ってよかったなって思う。

田中：　へぇぇ。なにがきっかけでそれをするようになったの？

加藤：　あのね、中途かけのものがいっぱいあるの。ノートとか、それをいっぱいにすればひとつにまとまると思うんだけど。なんだろ。本でもあるでしょ？　メモしなさいよとか。先輩達でもちゃんとした人たちはメモ取ってるし。ぼく日記まではつけれないけど、つけてる人は素晴らしいと思う。

田中：　うん。

加藤：　これ本で知ったんだけど『阿久悠』さんとか『井上ひさし』さんとか。

田中：　日記書いてる？

加藤：　日記書いてる人。日記は書けんけど、レコーディング・ダイエットの人いるじゃん？　『岡田斗司夫』さん。あの人のノートのつけ方読んで、確かにな一って思うところいっぱいあるもんで、とにかく何でもいいから書いて残してくことをやってる。でもひと月書かないこともあるので。でも去年からやってるのは、毎日『易』をやって。

田中：　易？

加藤：　そう。パソコンでクリックするとふたつ出るじゃん。それと今日の気をつけることを書いてる。それは２年続いてるから、おもしろいの（笑）

田中：　それは？

加藤：　わかんない（笑）　おかしな癖を作るのよ、ぼく、そうやって。変でしょ？（笑）う

ーん、誰かに聞きたいこと、あるじゃない？　けどそれを聞くとこないので、易にまかせようと思って。「今日ぼくはなにに注意したらいいですか？」って誰に聞いてもわかんないでしょ？

田中：　うん。

加藤：　だからそれを易に聞くの。月単位の易は手でやるの。１００円玉使って。だけど毎日のはパソコンでやるの。もう大人だから、先生がいないじゃない？　『岡本史郎』か誰かが、「昔の商売人で易を知らない奴はいない」っていう言葉が、たぶんどっかにあって、「それはそうだろうな」って。経営者の人は誰にも聞かないけど、易の人は人の顔を見て「あ、こいつこうだな」ってわかったりするじゃない。そういうのが欲しい。

田中：　欲しいの？

加藤：　うん。そういう能力がほしいんです。だから易を勉強してる（笑）　はははは。

田中：　それはなんのために欲しいの？

加藤：　自然に身についてるもんだと思うんだけど、「やだなー」って時、嫌になるじゃん。「いいなー」っていったらよくなるので、常に「いいな」って思っとらんといかんだけど。「なんで嫌なのかな？」を探るとかさ、そういうのがある。

田中：　原因を取除くために。

加藤：　そうそう。「これはこうなってるから、嫌なのかな？」とか。それはある。だから「教えて、先生」がいないから「教えて、自然」みたいな。易なんて１００％自然じゃない。８×８で６４　それがいろんなところに発生してるから。けど６４全部覚えてないから、毎日の癖として一回やって、だんだん覚えていこうと思って。真剣に勉強すれば覚えると思うんだけど。

田中：　ではない。

加藤：　ではない。中日新聞の『運勢』見るのと一緒。

田中：　あー、私もあれは見てる。

加藤：　あれは絶対当たってるので。当たるようにしてるので（笑）

田中：　注意するところを見るために、見るんだね。

加藤：　そうそうそう。

田中：　占いで、いいとこを見るとテンションが上がるから、悪いことが書いてあったとしても忘れちゃう、という見方をする人もいるけど。

加藤：　そっちでもいいんだよ。悪いことがあっても、まだその時点では変えられるはずなので。朝令暮改型で全然いいので。今なにが出たのかは、忘れてるからね。思い出そうとしても、思い出せない（笑）けど、それはその時だから。

田中：　移り変わってるしね。

加藤：　変わってるので。ただ書くようにしてる、ちょっと変人です。

田中：　なにか作りあげてるのかな。いろいろ積み上げて。

加藤：　そうね、積み上げたものがないもんでさ。なんか欲しいなっていうのがある。気づけばいろいろあるんだけどね。

田中：　うん。

加藤：　すべてはあるんですよ。無い物ねだりしてるけど、ほんとはあるんだろうなっていうのはあって。

田中：　そうね。すごい経営者はメモしてるとかっておっしゃってるから、そういうのに憧れる反面、今のフリーなものも捨てたくないみたいな。

加藤：　うん。いいことやってるなって人のマネは絶対したいの。昔ハウツー本にはまったことがあって、いろいろやったの。で、続いてることもあるので、いいことは絶対自分でやらないとダメ。

田中：　うん。

加藤：　よし、やろうって、それはすぐ出来る。それぐらいの柔軟さはあるんだけど。自分がやってることが一番正しいと思ってる。

田中：　そうだね。その感覚で泳いで来てる感じがするね。

加藤：　そうだよ。例えばテレビで、「夜寝る時に（電気の）小玉をつけて寝ると太る」っていうのを信じてて。真っ暗にしなきゃいけないって。で、今になってみるとさ、真っ暗はいけないとか説が変わってたりするじゃない。仕方ないけど「そうなのぉ？」ってなる（笑）

田中：　あはははは。

加藤：　そういう自分教がいっぱいある。

田中：　他にはどんなのがあるの？（笑）

加藤：　ん？　「夜爪切るな的な」とか。具体的には今思いつかないけど、感覚的にはいっぱいある。うーん……。

田中：　笑

加藤：　こうやって思い出すのが大変なのよ。

田中：　加藤さん、傍で見てるとおもしろそう。行動とかも。

加藤：　あー。まぁ、そう努めてるからね（笑）　つまらんことは、ないと思う。自分でしてないもん。絶対楽しくしようとしてる。そうやってひとりで遊んでるね。今楽しいのは、銭湯に通うことかな。

田中：　銭湯？

加藤：　うん。人がぐちゃぐちゃいるのは嫌だけど。近くで回数券買うと安いところがあって、そこ煙草より安くなっちゃったから、煙草やめようかなって。

田中：　へぇ。煙草、簡単に止められそうだね。

加藤：　うん。過去何回かやってるよ。簡単に止められるってわかったから、吸ってる（笑）

田中：　あはははは。

加藤：　「簡単じゃん。明日から止めれるよ」って自信があるから、だから吸ってる。銘柄もこだわらないし、とういうことはいつでも止めれる。

なんか面白い話ないかなぁ。なんでも聞いて。なんでも答えてあげるから。今日のはちょっと今までの流れで行くと、初の書き下ろしにならない、つまんないパターンじゃない？

田中：　そんなこと、ないと思う（笑）

加藤：　ほんと？（笑）

田中：　わからなさ加減がおもしろい感じがする。

加藤：　絶対、好きなことしか言ってないよ。質問されたことには答えてないはず。

田中：　だめじゃん（笑）

加藤：　振りかえると、いろいろあるなって感じ。今、会社の話だけだもんね。人生で年表つくると違うだろうし。『見わたす手帳』って知ってる？　生まれた時から、大事なところだけ書いていく。「〇年卒業」とか、履歴書く時便利でしょ？　書くことないけど（笑）

田中：　だって会社勤め、嫌なんでしょ？（笑）

加藤：　そう。嫌なの（笑）　あー、「お姉ちゃん（娘さん）の誕生日すぐ言え」って言われても言えないもん。年式、西暦で言えないから、言える人みるとすごいなって思う。書かないと言えない。

田中：　だから今も書いてるの？（笑）

加藤：　そう。こうやって話しながらだと、「いろんなことあったな」って箇条書きに出来るね。

・・・・・・　つづく　^ ^

◆なぜこの答なんだ？……に興味がある

田中：　ご自分でアバウトっておっしゃってるけど、伝える時とかは、正確に伝えたいって思ってる部分がすごくある感じがする。

加藤：　そう！　あるね。

田中：　そこはアバウトじゃないみたいな。

加藤：　下の坊主は小学校６年生なんだけど、夏休みの宿題の工作の時には「まず描け」って言うの。「なにを作りたいのか、描け」って。「おまえの頭に中にないことは作れないから描け。そしたら手伝ってやる」って。そうすると泣き出しちゃう。毎回夏休み、それ言ってるの。

田中：　ＮＬＰで言うとね、人ってそれぞれに優位感覚っていって、得意な感覚があるの。だから、息子さんとはそれが違うかもしれない。

加藤：　あー。そういうことか。やつには出来んのかもしれんね。

田中：　うーん。練習すれば出来るようになるけど。例えば何かを組み立てる時、取説を見る人、説明聞いてわかる人、やりながら覚える人とか、大まかに言えばね。

加藤：　そういうことかぁ。ダメだなぁ。全部一本でいっちゃうなぁ。

田中：　だから違う人同士で話す時、お互いが理解出来るように工夫するとか、時間が必要だったりする。

加藤：　ほんとだね。毎年言ってるから、変えてみないといかんね。なんせ小学校６年生なんでね、「プラモデルぐらい自分で買ってきて作れよ」って思った時があったんだけど。今はやっとその辺に目覚めてくれて、レゴとか集中してやってるから「よしよし」って。もう興味あることしか、やらせんようにしようと思って。

田中：　うん。結構自分でやれてきたことや、やり方とかって、人にも当てはまると思っちゃうんだけど。

加藤：　思っちゃってるね。

田中：　ね。「違うんだな、それぞれ」って分かるだけで、人間関係もだいぶ楽になる。

加藤：　うん。受け入れる。それは受け入れるよ。けど、なんとかしてやりたいんだよなぁ。小学校、中学校で勉強の方法が分かっとれば、テストもいい点数がすぐとれるのにって思うもん。

田中：　うん（笑）

加藤：　やらないんだけどね（笑）　ぼくも子供の頃、大人の言うことなんて聞かなかったもんね。今になって「ちゃんとやっとけばよかったな」って思う。

田中：　斉藤孝さんっているじゃん。

加藤：　３色ボールペンの人でしょ？

田中：　うん。あの人も学生時代、テストで点が取れなかったらしいんだけど、ある時に「先生がテストを作る時にどういう答えを導き出したいのか？」って。「単元で重要なポイントがあって、それを答えさせたいんだな」って分かった時に、逆算というか、「この答えを出させるためには、こういう問題じゃないとダメだろう」みたいな。

加藤：　あはははは。

田中：　そういうのが見えるようになったら、すごく点数が上がったって。

加藤：　うちの坊主のテストなんて、裏を見ると車の絵ばっかり書いてある。

田中：　あはははは。

加藤：　濁点とかないと、ペケじゃない。「こんだけ絵を描く時間あったら読み返せよ」ってみんなで怒るんだけど、「はいはい」って。

田中：　なんか、似てる？（笑）

加藤：　いやいや。ぼくは間違ってた部分しか見ないよ。１００点なんて、別にどうでもいい。「なんで間違ったのか？」は探りたいのがある。だから５０点ぐらいの点数の方が、よっぽどおもしろいなって。

田中：　ふふふふ。

加藤：　「なぜ、この答えなんだ？」っていうのが、おもしろい。

田中：　おもしろいよね。

加藤：　で、裏はびっちり絵が描いてある（笑）　あはははは。「いい加減にしろよ」って。大好きなの、車。

田中：　うん（笑）

・・・・・・　つづく　^ ^

◆会社をたためるということは出来上がった会社だということ

加藤：　倅には、うちのエアコン屋は継がせないので。

田中：　継がせない？

加藤：　うん。こんな危険な商売はやらなくていいので。

田中：　危険なの？

加藤：　危険ですよ。建設業と一緒だから、梯子に登ったりだとか、手を切ったりとか危険ですよ。

田中：　なにか怪我とかされたこと、あるんですか？

加藤：　ぼくはないね。従業員が落ちて頭切ったりとかはあったんので。あといろいろ梯子から、屋根から落ちて死んだりとかしてるじゃない。そういうのがあるから、ちゃんと勉強して机に向かった仕事でいいんじゃないかなって。

田中：　そうなんだ。そう思ってるんだ。

加藤：　うん。そう思ってる。だからぼく、たたむ準備しかしてないもん。明日たためるんだったら、すごく出来上がった会社ってことでしょう？　まだ絶対たためないので。　借金もあるし、「たためたら、素敵だな」って。大ちゃん（加藤大志朗さん）と逆です。「未来永劫お客さんのために」とか代々とか全然考えてない。たためるのが、素敵。

田中：　ふぅん。

加藤：　先輩でひとりいるんですけどね。サービスの方でたたんだ人が。何人も育てて、みんな独立させて「はい、終り」って。「かっこいい！」って思って。そういうふうになりたい。「おしまいですよ。ご隠居さんですよ、私は」そっちを目指してる。まぁ土地売ればたぶん退職金は出るので、それでいい。従業員のために退職金積み立てるんなら、「土地代払っとけ」って。

田中：　へぇ。自分でちゃんとゴールを決めてるんですね。

加藤：　うんうん。そうなんです。ずっとやる気ない。その頃には代わりの会社があって、エアコンやってくれる人がおって、後は全部「そっちに行ってくださいね」って案内出して終わりた

いなって。だって、どっかで死ぬんだもん、絶対に。適当に生きてるだけですよ。土地の利と人の利だけで（笑）「よくここまでして頂きました。どうもありがとうございます」ってそれだけでいいです。

田中：　笑

加藤：　お姉ちゃんも今年から大学生で。お金かかるしね、びっくりするよ。

田中：　ほんとに。

加藤：　お姉ちゃんもバイト探してるけど、今時給９００円とかだもんね。おれ、４５０円、５００円の時代だからさ「すげーな」って思って。ま、一回はどっかで働いて、あと「商売でもやってくれたらな」って思う。絶対使われちゃいけないよ。うん、たぶん仕事はいくらでもあると思うからね。作ればね。それか公務員やってほしいね。「９時５時の人はいいなぁ」って思うもん。

田中：　なんか、自由な感じなんだけど、子供さんには割に。

加藤：　そうそうそう（笑）　普通を求めるの。

田中：　安定というか、そういったものを求めてるよね。

加藤：　うん、求めてるね。不安定だから、こっちが。「リーマンショックとかもう一回来たら、うち絶対潰れるな」って思う。なんとか乗り切ったけど、リーマンショックと震災あったでしょう？

田中：　あったね。

加藤：　「ここまでみんな絞るか」っていうぐらい仕事止めたので。「お手上げでーす」ってなる寸前だったね。クビにしたわけじゃないけど上手いこと従業員が辞めたりして、あの時４人分給料払ってたら、うち潰れてました。今年はふたりしかいないんだけど、創業以来最高益でした（笑）

田中：　すごいね。

加藤：　「よーし。やり方だな」って（笑）　たたむ準備するには人が少ない方がいい。あとはまた違う仕組みを作ればいい。けど呼ばれたらすぐ行かないと、信用がないので、だらだらして

ます。

田中：　ん？？

加藤：　だらだらしとらんと、呼ばれた時すぐ行けないでしょ？（笑）

田中：　あはははは。

加藤：　予定入れちゃうと行けないから、ぼくはフリーにしてないといけないんです。「早いねー、加藤くんは」って言われるのが一番なんです。「もう来てくれたの？」「来ますよー」って（笑）

田中：　忙しいけど、飛んできたんですよー的な？（笑）

加藤：　そうそうそう。嘘ぴょーんって思いながら（笑）　仕方ないよね、僕エアコン屋しか出来ないんだもん。

田中：　そんなふうに言いながら、全然悲観してる感じがしない。してないよね？

加藤：　うん。なんでも出来ると思ってる。ははははは。

田中：　だよね。言ってるだけだよね（笑）

加藤：　うん。わかる？（笑）　大体ね、エアコンつける道具があれば、工務店さんがやる仕事は大抵出来るんですよ。やりたくないけどね。それは餅は餅屋に任せないと、プロにね。

田中：　すごく大事にしてるものがあるような気がする。

加藤：　ないよぉ。

田中：　そう？

加藤：　たぶんその時の気分だと思うね、ぼく。「ちゃんとやろう」って時と「手を抜こう」って思う時と。こんなん見たらお客さん怒るよ（笑）　多分お見通しだろうけどね。何回もご用命してくれる人はいい人、一回限りの人は見透かされたということで（笑）

田中：　ぷ。

加藤：　「こんないい加減なところ、二度と頼まねーぞ」って（笑）

田中：　今までに、喜代一さんがマジに決断したことって、なにかある？

加藤：　うーん……ないなぁ。決断？

田中：　うん。

加藤：　ぼく結婚も決断じゃないんですよ。女房に脅されたんですよね。高一からつきあっていたので。

田中：　ほー。

加藤：　２５かな、ぼく結婚したの。

田中：　長いね。

加藤：　長いですよ、７年。で「いい加減結婚せんとヤバいんじゃない」って、そういう話した覚えがある。子供が出来たとかじゃないですよ、けど責任取らされるような。で、挨拶行って。けど「娘さんをぼくに下さい」なんてよう言わんもんで。

当時木曜スペシャルでＵＦＯ特集とかしてて、女房の親父、そういうのが大好きで。ノストラダムスとかちょうどやってて、その番組が終わった瞬間「そういうわけで、結婚させてください」って。

田中：　あっはははは。

加藤：　どさくさに紛れて。もう女房がっかりしてさ（笑）

田中：　「そういうわけで」って（笑）

加藤：　「この人、そういうわけで……にしたよ！」って。全部そういうふう。決断ね……。家買う時も違うもんねぇ。

田中：　うん？

加藤：　家買う時もですね、ぼく一生家なんて、人生の中で土地買うなんて夢にも思ってなかったんですけど。当時大家さんの平屋を一軒借りてて、大家さんが「娘が結婚して、そこに住まわせるから、出てけ」って。それも急に言うんですよ。

田中：　うん。

加藤：　えーって。一軒家だから犬飼ってたのね。ハスキーなんだけど、大きい犬飼ってるとマンションダメなんですよ。で、プラーと探しとったら今の家があって。その時ぐらいかな。銀行に「お金貸して下さい」って真剣に言ったの。で貸してくれたから、それで買えたの。

田中：　犬の為に買った……（笑）

加藤：　そう（笑）　全部自分じゃないの。なんかが絶対影響してるの。犬が自分の気を狂わしてる。

田中：　犬好きだもんね。

加藤：　うん。猫大嫌い（笑）　今まで自分で決断してないから、こうなってるのかもしれん。ほんと人任せ。そういう質問されると、決断ないなー。

田中：　ふふふ。

加藤：　うん。ない。

田中：　ね。

加藤：　うん。選んではいるけど、決断というほど重たいものはない。もの買う時もないな。靴買う時は２８があるから買うだけだし。

田中：　ふふふふ。

加藤：　はははは。後先考えてないでしょ。

田中：　でも、たたむことだけは、考えてるんでしょ？

加藤：　あ、うん。それは、考えてる。それはちょっと大事なことなので。

田中：　それが今までの人生の中で、初の決断かもしれない（笑）

加藤：　たたみ方とか（笑）　「あんまり物増やしてもいかんな」とか。引っ越しもいっぱいしてるんで、「家なんて絶対買えないんだろうな」「買ってる人、すごいな」って思ってた。

田中：　どうしてきれいにたたむことに対する思い入れがあるんだろうね？

加藤：　うーん。「たたむための準備してれば、続けられるぞ」っていう、それがあるのよ。明日たためるっていう準備が出来たってことは、続けられる裏付けにもなる。一番すごいことなの、それが。きれいさっぱり「自分はここで終わりますよ」っていうのは、やっぱりかっこいいのかなって思う。

田中：　選択肢がある感じだよね、そこんとこで。

加藤：　うんうん。そう。お手上げで潰れるんじゃなくて、「きれいに清算出来ましたよ」っていうのが欲しい。ほんとはしっかり老後のお金も出来て、従業員への退職金も払えて、土地売ったらお金が余るぐらいがちょうどいい。それが目標。これだけだらだら遊んでいたらね、まだまだ年数かかるよ。たぶん、なるようになると思うので。そういうのを望んでいるから、たぶんそういうふうにいくと思うよ。

・・・・・・　つづく　^ ^

◆書いたことは実現するんだから書けばいい

田中：　なんかおもしろいね。ここに行くために、こっちから進みつつ、違う方からも掘ってる感じがするね。

加藤：　あー。遠回りはするのは好きよ。

田中：　ね。だからメモ取ったり。「こっちの方が近い気がするんだけど」っていろいろしてみるんだけど「そうでもないよね」みたいな部分が。

加藤：　あ、あるね（笑）　そうだね。独立したての頃、ハウツー本にはまって。『神田昌典』だとかマインドマップとか、サン〇ーク出版の本はほとんど読んだみたいな。今ではもうインチキ臭くて読めないよ。けど実際動いてたら、そうなってたから。

田中：　うん。

加藤：　「自分が行動したら、こうなるね」って、そこで残ってきたのを続けてるだけ。昔書いたマップだとかとってあるもん（笑）　確かになってるよ、そういうふうに。「書いたこと、望んだことは全部叶ってるな」って思ってるから「書けばいいじゃん」って思うだけ。

田中：　うん。

加藤：　確かに「書けばなるな」って。「お金欲しいな」って書いとけば絶対お金来るなって思うもん。だって今だってお金、必要な時は必ず来るので。

田中：　そうだね。

加藤：　家買うときだって銀行貸してくれたから、あるもん。だから不自由はなんもしてないです。

田中：　願いを叶えようって、みんなしゃかりきになりがちだけど。

加藤：　うん。もったいないなって思うもん。じっとしとればいいんだぞって思う。

田中：　うん。泳ぎを覚える時に力入ってると、泳げないのと同じで。

加藤：　そうね。いつからかな？　ぼくこんなに脱力な人生を送ってるのって（笑）

田中：　いつからなの？

加藤：　いやいや（笑）　そういうふうに見せてるだけで、ちゃんと働いてますって（笑）

田中：　昔っからなの？　そういう考え方とか。

加藤：　考え方は。自分でなんとかしたら、なんとかなる領域ってあるでしょ？　あと、家族にしても、ぼくが弄ろうが何しようが、なんともならない領域がある。雨とか自然事も、もっとなんともならんことあるでしょ。だから、なんかするの、やめたの。本に書いてあった気がする。それが残ってる気がする。

田中：　うん。

加藤：　自分を変えればいいんでしょって、そこらじゅうの本に書いてありますよ。だけど、どっかで腑に落ちた時があって。「あー、もう人には構わんどこう」と思って、それはある。「いくら言ったって、ダメだよ」って。だから『ガヤ』でとばすだけ（笑）

田中：　ふふふふ。

加藤：　言いっぱなし（笑）

・・・・・・　つづく　^ ^

オマケノページ

こちら、好奇心でかきだした質問表 です ^ ^

加藤さんにもインタビュー後、おつきあい いただきました。
まずは どうぞ、みなさんもたのしんでくださいませ★★

＜いろいろ質問表＞
・月並みですが、小さい頃はどんなこどもでしたか
・好きな本を一冊選んでください
・いつも必ずする「習慣」はありますか
・ねこ派ですか？いぬ派ですか
・今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか
・それのどの部分が大変だと感じたのでしょう
・それをどうやって乗り越えたんですか
・その時、大切にしていたことは何ですか
・今頭の中にうかんでいる人はだれですか
・その人は、何か言っていますか
・３つ願いが叶うとしたら、何を願いますか
・人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか
・人として、これは譲れないっしょ？？っていうのがあるとしたら、何ですか
・RPGでパーティを組むとしたら、どんなキャラクターを選びますか
・因みにそのなかで、あなたの役割（キャラ）はなんですか
・それはどんな冒険になるのでしょう
・「攻め」と「守り」自分はどちらだと思いますか
・全く何の制約もないとしたら、何をしますか
・聞くとムカッってくる言葉ってありますか
・どんな時にイラッとしますか
・落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか
・何をしている時が一番たのしいと感じますか
・今一番欲しいものは何ですか
・あなたの萌えポイントをおしえて下さい
・今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、２つ語って下さい
・そこで何に気付きましたか
・今の自分を突き動かしているものは、何だと思いますか
・今死んでも悔いはありませんか
・身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか

・世界に向けて演説をするとしたら、何を一番伝えたいですか
・生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか
・人間以外のものに生まれ変われるとしたら、なにがいいですか
・朝起きたら、雨が降っていました、どんなことを思いますか
・世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか
・自分の性格を象徴するようなエピソードがあったら、おしえてください
・自分のキャラを一言でいうなら
・今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか
・今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったらおしえてください
・一年後、どんな自分でいるでしょうか
・最後に何か一言お願いします＾＾

・・・・・・

つづきは加藤さんのおこたえデス ＾＾

田中：　ふふ。どんな子だったんですか？

加藤：　そこ行っちゃう？　もう。それかー。

田中：　ふふふ。

加藤：　大人の顔色見てましたよ。今でもそうだもん。人の観察するの、大好きだもん。まわりの人みんな、在所帰るじゃない？　夏とか帰省するんですよ。そうすると引く手あまたね。「きー坊、きー坊」って言われて。だから「いい子にするにはどうすればいいか」って、そんな人間ですよ（笑）

田中：　いい子に見られるための振る舞いは完璧、と（笑）

加藤：　そうです。けど絶対内気な子だと思います。

田中：　だね。そういったものに敏感ということは。

加藤：　そう。内気なんですよ。ただ親の愛はたぶんないので、ぼく。だからぼくこういう人間になっちゃった。あんまり愛情ないなぁ。ないです（笑）

田中：　でも自分で充分に与えてる感じがするよ。

加藤：　自分で自分を？　あー、ひとり上手になるんですよ。ひとりで遊ぶんです。大人が構ってくれないから。弟いるんだけど、７つ違うので兄弟の感覚無いもん。だから女房が自分の姉妹とかと２こぐらいしか違わんもんで、きゃっきゃっ言ってしゃべってるのを見ると「ようしゃべることがあるねぇ」「俺、よう弟と遊ばんわ」って。

田中：　笑

加藤：　でも最近歳くってきてから、オヤジ部類じゃん。７つ違っても。だんだんしゃべれることが増えてきたかなって。そんな子です。

田中：　今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか　えっと、火事とか？

加藤：　火事は。火事どうでもいいんですよ。お姉ちゃんが病気になったんですよ。頭に腫瘍かなんかができて。小学校６年生の時、修学旅行も行けずに半年ぐらい入院してたね。水が溜ま

っちゃったのかな。水頭症みたいな。穴開けてドレーン入れて。あれ見た時は。

田中：　それは。

加藤：　レントゲンみても結構大きいんですよ。もう女房なんて、気狂っちゃってわんわん泣くでしょ。「やいやい」と思いながら「死ぬのかなぁ」とか。その時ぐらいだね。「これ、俺頑張ってもどうしようもないな」って思ったの。

田中：　うん。

加藤：　だから「やーめた」って。あれ、ひどかったな。で、半年くらい入院あったので、しょっちゅう病院行ってたんですよ。よく考えると、それ真夏だったんですね。「おいおい、おれ仕事せんでも会社回ってくな」って思って。それからだね「回ってる。俺おらんでもいいな」って（笑）　それから働かなくなりました。

例えば、崇高な占い師さんに「この子の運命、どうなるの？」って聞いた時に「助かります」って言われれば嬉しいけど、「死にます」って言われても、もうどうしようもないもんね。

田中：　うん。

加藤：　「どっち言われても、一緒か」と思った時に「ずっと一緒におればいいな」って。治りましたけど。

田中：　手放された。

加藤：　うん。ぼくはそうだったんだけど、女房はそうじゃないんですよ。あの人は今回でも大学で「すべってたら、どうしよう」って。「おまえが百度参りして受かるんだったら、してこい。いらんこと、思うな」って。いらんことばっか、思ってるんです。

娘が大きい病気になるまでは、女房の本棚にはそういう病気の本がいっぱいあったんですよ。結局自分で呼んでるんだよね、そういうのを。「だからこうなるんだわ」って叱ったことがある。だから「思っちゃダメよ」って。

田中：　それって、真理でもあると思う。

加藤：　そうでしょう。「絶対おまえ呼んでるぞ、これ」「だから自分が体験したいことになっちゃうんだぞ」って言ったことがある。

田中：　うん。人間って意識と無意識ってあるじゃじゃない。サン〇ーク出版の本読まれてたら、入ってるでしょ（笑）

加藤：　入ってる、入ってる。完璧だよ（笑）

田中：　笑　願いとかも無意識が作用していて、強く願うっていうのは、自分がそれがないってことを自分に言い聞かせてることで。

加藤：　そうそう。逆なんだよね。

田中：　逆なの。

加藤：　ぼくもその仕組みをもうちょっとでわかりかけてるんだけど。潜在意識使えたら、もっと引き寄せると思うね、楽しいこと。それを今修行中。で、易やってんの（笑）

田中：　あはははは。

加藤：　易と気功　「あれはすごいなぁ」「絶対深呼吸だな」って。『気』を強くするDVD買って。やっぱし、『陰』と『陽』だからさ。「表叩いたら、裏も叩けよ」ってあって。足の裏とかもこんなところ全然刺激せんよなぁと。陰陽で考えたら、そうかもしれんって。

田中：　うん。

加藤：　潜在意識はすごいパワーだから。使いたいんだけど使い方を知らない。

田中：　結構使ってない？

加藤：　いや。だからのほほんとするようにしてるんです。「金も全部ある」と。欲しい時にあるから、欲しいって言わないとか。そういうふうにしたら、いいのかなって思う。で、嫌なものには近づかない。

田中：　そうそう。

加藤：　嫌なことがあったら、否定するとか。自分で自分に害を与えちゃってると思うんですよ。それに「バカ言ってちゃいかん」って（笑）

田中：　私がやってるのは、言葉を変換する。

加藤：　進行形にしろ……とかいろいろあるけど、難しい。

田中：　じゃなくて。いい意味じゃない単語。「悪い」「嫌う」とか、そういう言葉を使わないようにしてる。

加藤：　難しいなぁ。

田中：　「嫌い」だったら「好きじゃない」とか。

加藤：　それ一回ひっかける必要があるね。気にしてなきゃいかんね。

田中：　うん。言葉って発した時点で、相手にも言ってるんだけど、自分にも言ってることで。それを出す前に一回見る感じ。メールとかも「体調に気をつけて」より「健やかにおすごしください」みたいな。

加藤：　難しいな！

田中：　言葉って力があるから。言葉、単語自体がプラスなものを使うように、私はしてるかな。

加藤：　なるほどね。

田中：　『言霊』ってあって。相手にいい言葉を投げかけるということは、自分にもそれを言ってるのと同じだから。

加藤：　あー。「汚い言葉をつかうな」っていうのは。最近は減らしてます。

田中：　『ガヤ』は言うけど？（笑）

加藤：　『ガヤ』と汚い言葉は違うでしょ。「正せよ」ってことなの、自分も。しゃべる前にっていうのは、出来つつあるの。ふっと思って言っちゃって「あー、言っちゃったよ」っていうのは、一番いかんことだもんで。過去３回ぐらい修羅場があるんだけど。

田中：　えー、どんなやつ？（笑）

加藤：　笑　仕事でもあるんですよ。口は災いの元っていっぱいメモした覚えがある。気をつけるためにね。そんな感じ。

田中：　うん。気をつける部分って、そういったところかなって。小さいところかもしれないけど、積み重なってくし。私も気になることはメモっているかな、必要なことは。マザーテレサの言葉とか。端折るけど思考が言葉に、言葉は行動に、行動は習慣に、習慣は性格に、性格は運命になるからねっていうやつ。

加藤：　やっぱり思考だな。

田中：　うん。考える時も言葉を使うわけだから、使う言葉も気をつける。

加藤：　瞑想や座禅とかで「頭をいっぺん白くしなさいよ」ってあるじゃない？

田中：　うん。

加藤：　無理だもん。いっぱいいろんなことが浮かんで来ちゃうもん。瞑想の本とか読んだけど、おれ出来んなって。

田中：　単純作業もいいよ。

加藤：　お風呂好きって言ったけど、水風呂で唯一それが出来るかな。１分、２分しか入っていられないけど、そこに集中する（笑）

田中：　私は掃除かな（笑）　掃除機なくて箒と雑巾で。案外そういう単純作業って、やってるうちに集中してて。

加藤：　ああ。それで空になるわけ？

田中：　うん。からっぽになる意識はないんだけど、そういう時にいろんなことが浮かんでくるというか、閃くというか。

加藤：　あー、逆にね。白くなったからクリアになる。

田中：　うん。余計なことを考えなくなってるから、そういったのが浮かんでくるのかなって。

加藤：　それメモしなきゃいけないんだよね。大事なんだよね。ふわって出てきたこと。

田中：　ね。でもそこで忘れちゃうことは大したことじゃない。

加藤：　なるほど。いや、ダメ。そういうのはとっとかないと。なんだったかなって思い出すことが一番損なことだもんで。

田中：　それでメモってるの？

加藤：　うん。昨日はテレビでエッグタイマーって出てて、ほしいなって思ったから付箋に書いて貼ってある。それを処理してくのも好きなのよ。ノートもそうよ。やること書いて、作るのが好き。

田中：　タスクノート。

加藤：　そうだね。タスク魔かもしれん。けど、最近はタスクでも、８とかいうのもあるんですよ。残ったやつも書いてるんで、８週目ってやつ。そういうやつは消す。タスク魔ではある。

田中：　「やった」って目に見えるのは、成果としてやる気になるよね。

加藤：　なる。その通りにならないですけど。やらんこともいっぱいあるし、やらんことが増えると「自分ってダメな人間かな」っていつも思うんだけど、そこは「まぁいいか」になるんですよ、ぼくの場合はね。

・・・・・・　つづく　^ ^

田中：　３つ願いが叶うとしたら、何を願いますか。

加藤：　いつも人のを見てるけど、なんにも思わんもんな。３つかぁ。どっか旅行行きたいな。ピラミッドとオーロラと。ピラミッドもつまんないってわかってるんだけど、実際自分の目で見たいので。オーロラも絶対自分の目で見てみたい、死ぬまでにね。３つないね。後、日頃やってるから大丈夫（笑）

田中：　それを見に行く感じなのね。

加藤：　そうそう。豪華客船に乗ってそういうのを見てみたい。オーロラは飛行機になっちゃうけど。

田中：　うん。

加藤：　新婚旅行もそうなんですけど、暑いところでぼーっとしたかったんですよ。

田中：　暑いところで、ぼーっと？？

加藤：　日本では絶対ぼーっと出来ないので、ぼく。仕事上、この時期。

田中：　あー。

加藤：　それが強くあったので。最近は近くてもいいから、ぼーっと出来れば、それでいい。

田中：　いいじゃん、お風呂屋さんとか（笑）

加藤：　うん。そりゃ究極だよ。ちょっと時間あるなっていうと猿投温泉とか、行っちゃう。もう大好き（笑）

田中：　ふふふふ。
　　人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか。

加藤：　全部。振る舞いとか、言葉遣いとか全部みますね。人間ウォッチングの鬼ですから。こうやってふたりでしゃべってると、両方みてる。

田中：　両方とは？

加藤：　関係ない周りの人の会話聞きながらとか。それは得意。

田中：　そこら辺で、なにを？

加藤：　なーんにもないよ。見てるだけ。振る舞いを見てるだけ。で、いい振る舞いだと真似したくなる。例えば、昔の上司はリップスティックを隠すのね。隠して塗るの。それ「かっこいい」って思って、ぼくもそうやって（笑）

田中：　あはははは。

加藤：　そういうちっちゃなことを（笑）　ああやっていいんだとか。うーん。なんせ、どんくさいのが嫌いなんで、スマートな人がいい。スマートな振る舞いをみるのが好き。以上。

田中：　人として、これは譲れないっしょ？？っていうのがあるとしたら、何ですか。

加藤：　人として？　挨拶ぐらいじゃないの？　大きな声で、笑顔で挨拶。けどマックとかの、嘘の笑顔は許せない。ああいう吉〇美和的な笑顔は無理。それ嘘だろっていう笑顔。ドリ〇ムの吉〇美和、躁鬱だと思います。で、躁の時に歌ってるんだなと思う。

田中：　あの人？

加藤：　ぼくの中ではそう思ってるだけですよ。「あんなにテンションあげられないよー」って思うもん。「あんなににこにこ出来る？」「無理ー」って。絶対あれは作ってると思う。「ひとりの時は暗いのね」ってひとりで納得してる。マックの笑顔も、「その笑顔、嘘」って。

田中：　笑

加藤：　笑顔でおったら自分自身にいいことが起きるだろうけどね。でもぼくは受け付けない。

田中：　嘘っこいのが嫌なんだね。

加藤：　あー、やだね。だから、映画も子役が泣くやつとかね、無理ー。「そんなん、演技に決まってるじゃん」って思うと、感情移入全然しなくなっちゃう。でも最近映画みて泣いてるね。『永遠の０』は我慢した。

田中：　ぷ。

加藤：　ツレが「嗚咽が出るぐらい泣いた」って言うから見に行ったけど、我慢してスクリーンの右肩をずっと見てた。

田中：　あはははは。

加藤：　スクリーンの画を見たら、絶対泣いちゃうって思ったから。

田中：　なんでー（笑）

加藤：　いや、隣でわんわん泣いてるからからさ「いかん、いかん。移っちゃう」って。それを我慢するのも好きなの。すぐ泣けると思う。

田中：　泣くことに抵抗は、ない？

加藤：　抵抗はない。けど、人前では泣きたくないね。

田中：　泣くんだったら、ひとりがいいの？

加藤：　ひとりがいい。ひとりでわんわん泣いたことありますもん。鬱だなって２回目来た時。

田中：　どんな時に来たの？

加藤：　あれ、なんだろな。あのね、自分がたぶん「上向いて唾吐いとったな」って思った時。「こういう時、人死ぬな」「こういう時、絶対自殺するな」と。「こういう時だな、みんな死ぬんだな」って自分で思ったから、あれは救われて。その時もう、鏡見て、泣いた。「どうもすいませんでした」って（笑）

田中：　謝ったんだ（笑）

加藤：　謝った。女房にも「すいませんでした」って。「最近、言動、行動がおかしい」って女房も察知してたから。鬱っぽかったり、偉そうにしゃべっとったり。そういうのがあって、それに気づいた瞬間「あー、すいませんでしたー」って。

それが２回目の「あ、おれ鬱だな」って思った時。けど自分で分かるから偉いでしょ？　お医者さん、いらない。

田中：　そうだね。

加藤：　「全部自分がわるかったです」「なに天狗になってたんだろうな」って、それがあったね。

田中：　天狗になってる自分に気づいた感じなの？

加藤：　うん。気づいたね。「ほんとかっこわるいな、おれ」って思った。おれの考えはすべて正しいって、そういう感じで。鬱も内にこもる感じじゃなくて、『ひとり考え』が得意な時は鬱だと思うの。自分で自分を「これがこうで」「あいつはこうで」とか、中鬱。で、偉そうにしゃべり続けて、気づいた時には、あんなこと言ってたなって思った瞬間、あかんと思った。それからちょっと馬鹿になるようにしました。ぽよよよんとしました（笑）

田中：　それって、いくつぐらいの時？

加藤：　いつだろう？　５年。もっと前ね。３５歳以降の時。また話飛んじゃいますけど。

田中：　うん。

加藤：　『春夏秋冬理論』というのがあって、この時ぼく『冬』だったんですけど。春夏秋冬が三年年ずつグルって一周するやつね。３３、この辺りがおかしかったです、やっぱり。これ知った時。ぼく冬一年目だったことを覚えているので。いろんな行動して変わってって「こうすれば儲かるんだ」とかを１００％やってた時があって。この頃、やんちゃでしたね。失礼なことばっか、やってた。

田中：　うん。

加藤：　今考えるとよ。上手いこと書いといてね。

田中：　そのまま起こすだけだから（笑）

加藤：　あはははは。「こいつ、なに言っとるだ」ってなるから（笑）　ま、その『春夏秋冬理論』は嫌いだけど、合ってるから受け入れてる。やっぱり自然が基本になってるのは。自分らも自然なんで、そういうのは受け入れるね。これも易と一緒だと思うもんね。よく出来てる。

田中：　うん。宗教でもなんでも、根底は一緒だもんね。

加藤：　あー、一緒だと思います。易は好きです。習得したいけど、我流でいいです。ひとり

で「ははぁん」って思うのが好き（笑）　「こいつはこういうふう」「今こういう状態だな」って。大人でも子供みたいな振る舞いする人いるじゃないですか。「教えてもらってないの？」的な礼儀を知らない人とか。そういうの見ると「残念だな」「ちゃんとしろよ」って思う（笑）

田中：　ふふふ。

加藤：　だけど、それに気づいていなかったら、ぼくもそういう大人になっているので。まだまだ馬鹿なんだけど、もっと上には来てるはずなんで、自分としてはね。「ここじゃないぞ」って思うので、そこにいる人みると可哀そうでしょうがない。けどいくら言っても直らないのは人だから「頑張れよ」って。「おれは頑張るぞ」「頑張ってるし、ほっとけよ」以上。これ質問と全然合ってないね（笑）

・・・・・・　つづく　^ ^

田中：　あ、全然いいです（笑）
　　全く何の制約もないとしたら、何をしますか。

加藤：　うーん、家じゅう直してるだろうね。補修してる。

田中：　へぇ。好きなの？

加藤：　庭とかきれいにしてる。煉瓦とか買うだけ買ってきてきれいにしたりとか。これも偶然なんですけど。買った家は中古なんで、農家の家だったのね。平屋の母屋があって、今お袋住んでる離れがあって、Ｌの字型してて。ぼく昔、コの字の家を建てたいと漠然と思ってて。「あ、この家そうじゃん」って思った時に大事にしようと思った。

田中：　へぇぇ。

加藤：　それがまた破格の値で買えたんですよ。刈谷で１２０坪なんて買えないでしょ？　名古屋より高いんですから。個人売買の形になったので消費税もかからないし、かなり値引いてもらってマンション買うより安く買えたので。そのかわり内装は全部さわってね。

その頃バカだったから、広い部屋がほしかったから真ん中の壁とっちゃったの。ぼくエアコン屋だもんで部屋が広かろうが、エアコンきくようにするじゃない？

田中：　うん。

加藤：　でも今考えると、「地震来たら絶対つぶれるな」「誰か教えてくれよ」と思って（笑）　あ、家買った頃です。１０年ぐらい前です。家買った時に庭の木も勝手に切ったり、家なぶったりして、地の神が怒ったんでしょうね。

田中：　あー。

加藤：　狂ったんですよ、ぼくが。で、お祓いしてもらったら、なおったんです。

田中：　お祓いしたんだ。

加藤：　うん。したした。

田中：　そんなに、なんかあったの？　いろいろ。

加藤：　うん。家買った頃だ。　毎年、変なことが立て続けにあったんです。従業員が怪我するとか、お姉ちゃんが病気になるとか、んで火事でしょ。それが自分には来ないんですよ。まわりに全部いったから「全部おれに来てもいいのに」って思ったら、狂ったんでしょうね、その時に。

田中：　うん。

加藤：　その時知合いのお姉さんに「それはお祓い行かな、いかんよ」って。豊田の某所に行ったら「地の神が怒ってる」と。だから二回目のリフォームの時は見てもらって、お札もらって祭った。そういうのは信じる。やっちゃいかんことは、やっちゃいかんもんで。今考えたら、「あの木を切っちゃいかんかったもんな」って思うもん。

田中：　うん。それがやれちゃったということは、ね。

加藤：　そう。もうイケイケどんどんだった。「普通切らんな」「あれは失敗だな」って思うもん。以上。

田中：　あんまり落ち込まない感じだよね。

加藤：　あー、それは、ないです。

田中：　ね。

加藤：　うん。思い込みはあるけど、そう。だって仕方のないことでしょ。自分がチェンジすれば、自分で何とかなることなんで、それをすれば。

田中：　鬱状態の時に、装備した感じがする。

加藤：　うん！　した。武装した。

田中：　パイロットの脱出装置を設置した感じ。

加藤：　うん。取得したかもしれん。ハタラクヒト＊ペディア読んでると、よくあるけど、ケセラセラの人、多いでしょ？

田中：　うん。

加藤：　ぼくもまさに。だからそういう人を選んでるんじゃないかなって。

田中：　私が？（笑）

加藤：　自分も亜種に行かないと。違う人に、偶然会ったような人にインタビューするぐらいじゃないと似たような人が並ぶんじゃないかな。

田中：　うん。私の中であるのが、あんまりね『邪気』がある人はしたくないなって。

加藤：　あー、なかった？　おれ？　やった。

田中：　うん。さっき「嫌なものには近寄らない」って言ってたでしょ？　私もそこら辺は気をつけて見てるんだよね。ま、その人によって手放し具合って違ったりするんだけど、その根底に粘っこいもののない人を。ある人は、きっとＮＧな気がする。

加藤：　あー。もうそういう人には関わらない。「もういいや、寝ちゃお」って（笑）

田中：　寝なくったって、ボタン、ポンでいいでしょ（笑）

加藤：　そーするよ、はい。「これはおれの領域じゃないな」って思った時点で、ポンと。

田中：　ね。ひとりも好きだし。ひとり遊びも出来る人だし。

加藤：　あー、大好き。仕事は嫌いだけど事務所は大好き（笑）

田中：　何をしている時が一番楽しいと感じますか。

加藤：　なんだろね。ぼーっとしとる時が一番楽しいかもしれん。本読んでもネットサーフィンしてもいいんですよ。本でも読みだしたら止まらないし。だから好きなことをやれるのが一番いい。

田中：　うん。その好きなことは日によって違うんだね。

加藤：　そう。全然違う。それに引っかかったたら、これ「やらんといかんな」って。今、金魚の水槽をすごく掃除したい（笑）　この間亀は終わったので。後はメダカのまわりもきれいにしたいから。そんなのが好き。芝も伸びてきたし。

田中：　今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、２つ語って下さい。

加藤：　家買ったのと、お姉ちゃんの病気かな。その２つは大きいな。火事はどうでもいい。

田中：　うん。あんまり重くなさそうだもんね。

加藤：　うん。次の日から普通に仕事したもん。それはすごいなって思った。出来たじゃんって。「家、買えちゃったぜ」ってすごく嬉しかったもん。あれ銀行が貸してくれんかったら無理だもんね。マンションとか住んでたら、今みたいな商売やってなかったと思うし。ぼくいろいろ引っ越ししてるから、息子と娘には一か所でね、幼馴染がずっといて、帰る実家があってというふうにしたかったのもある。「よかったね、おまえら」、「余計なお世話だ」って言われるかもしれんけどね。

田中：　今の自分を突き動かしているものは、何だと思いますか。

加藤：　うーん、子供の為に……。子どもが成人するまでは。それぐらいかな。

田中：　子供さんのために。

加藤：　うん。自分で生きれるまで。「お金稼げるまでは稼いであげんといかんな」って。お父さんの稼ぎ方はちょっとずるいけどね（笑）

田中：　出来るだけ遊びたいんだもんね。

加藤：　出来るだけ、ぼーっとしとりたいもん。

・・・・・・　つづく　^ ^

田中：　生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか。

加藤：　あー、男でいいです。

田中：　男で、いい？

加藤：　女は嫌だ、出産とか無理。めんどくさそう。すっごくやだ。

田中：　めんどくさいの、いやそうだもんね。

加藤：　うん。男で日本がいいです。日本にもう一回生まれたい。こんないい国はない。

田中：　世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか。

加藤：　そうね。テレビか戦争だね。悪い情報があると戦争になるので。で、悪いことにしようとする集団。戦争で儲かる人いるわけでしょ。情報操作してる大元を突き止めて「やめなさいよ」って。ワクチン打てなくて死んじゃうとか、いるでしょ。「どうなってるんの？？」って思う。ぼく日本におって知らんぷりしとるけど。悪いことはしちゃダメですよ。まぁ、ある意味自然でしょ、地球上のことはね。手放して（笑）

田中：　はい？？

加藤：　「おれ頑張ってもなんともならんな」って。おれはおれで守る。戦争はやっちゃいけない。最近そういう感じになってるもんね。

田中：　きな臭いですけどね。

加藤：　うん。歴史的に繰り返してるぞっていうのがあるので。法律変えたり危ないなって。僕真っ先に人差し指切って「出れません」「撃てません」って言う（笑）

田中：　そういうので痛い思いをするのは大丈夫なの？

加藤：　うん。痛い思いしてもいい。徴兵されたら「ぼく鉄砲撃てません」けど、守るものは守る。穴でもなんでも掘っちゃう。食料とか集めて隠しちゃいそう。準備はする。でも戦争は行きたくない。敵でも殺せんね。絶対悪い夢見そうだもん。

田中：　自分ではさ、ちゃらんぽらんとか言ってるけど、結構頑固なところもあるよね。

加藤：　ふふふふ。それはわからん（笑）　まぁ、譲れんことは譲らんよ。うん。遠回しにで。

田中：　うん。のらりくらりとしながらも、それは絶対貫く、みたいな部分はあるんじゃない？

加藤：　うん。すーっと消えてくとか、ありますよ。いたくなかったりすると。「あ、どこ行った？」って。それはあるかもしれん（笑）八方美人で、ずるい人。

田中：　ふふふ。

加藤：　みんなにいい顔しといて、いざとなったらいない（笑）

田中：　自分のキャラを一言でいうと？

加藤：　今言ったやつでしょ。八方美人。百方美人でもなんでもいい。で、人が評価する。

田中：　百方美人であったとしても、「生き残れれば、いいじゃん」っていうのが根底にある気がする。

加藤：　はい。そうね。ずるくてもなんでもいいから、残っていたい。そうかもしれん。ずるいでしょ？

田中：　いや、それだけ生存本能が強いのかなって。

加藤：　あー、そうだね。死に損なったのは、まぁ生まれた時息をしてないっていうのはお袋から聞いたけど、そんなのはいくらでもあることだもんね。後はね、小さい時一回海に落ちて気絶したことがある。それぐらいかな。死にたくないね、死ぬけど。

田中：　鬱になりかけたっていう時も、ひとつの死に近いような。

加藤：　ああ、でれ近いと思うよ。「これ、逝けるな」って思うもん。死にに。無敵だもんで、死ねるわけでしょ。一番強い状態、死ねる時は。

田中：　無敵だから、死ねるの？

加藤：　そうそう。絶対そう思う。

田中：　怖いもの知らずで「死すら怖くない」と思うから、簡単に逝ける？

加藤：　そうそう。逝ける、逝ける。こういう時は逝けるって。だから「あ！」って思った。「いかん、いかん」って、それはすごくあったね。

田中：　なんか、それ新しい。

加藤：　だって無敵だもん。死ねるよ。後は辱めにも打ちひしがれて「穴があったら入りたいぐらい」になって終わりにするかのどっちか。けどまぁ死ぬぐらいの勇気があればなんでも出来るし、殺されることもないし。「死ぬ気ならなんでも出来るかな」っていうのはある。会社が潰れそうになったら百人力になる。

田中：　喜代一さんって、立ち位置がいくつもある感じがする。

加藤：　はい。嘘で生きてるから、嘘の加藤さんがいっぱいいますよ（笑）

田中：　その時に一番有効なところに立ってる、移動してるような。

加藤：　あー。ずるいかもしれない、そう見えるんだったら。たぶんそうだと思う。「はいはいー」ってそこにおるのね。「今日はこの加藤ちゃん」きっと手帳に書いてあると思う。お父さんも、社長も、旦那も色々やらないかんから「〇〇加藤さんを演じなさい」って書いてあると思う。それがどっかで効いてきてるんだね。

田中：　因みに今はどんな加藤ちゃん？

加藤：　いい。いい感じの加藤ちゃん。

田中：　ふふ。いい感じって？　わかんないよ（笑）

加藤：　思い出さなきゃいけない。だからすごく今ね、脳が汗かいてますよ。だってそんな質問受けたことないですもん。だって、読んでてわかるんだよ。「次、こういう質問来るんだな」って。でも違うじゃん。いざ聞いたら、汗かいてる「無理だぁ」って。

田中：　あっはははは。

加藤：　言葉にしづらいのね。下手くそなの。小説家とか、偉いなって思う。

田中：　ひとつの言葉を紡ぐのって、大変だと思います。

加藤：　ＰＴＡの会長やった時も祝辞だとか、全部コピペですよ。まぁ、「それなりに出来たな」ってあるんですけど。それまでに本読んでるんですよ、『挨拶文の書き方』とか。ネットサーフィンで切ったり貼ったり。けど、その調べ方にもいろいろあって、それはおれなりにあるもんで。違う部分で見る。

田中：　うん。変化球で（笑）

加藤：　うん。アマゾンで本買う時も、レビュー１から見ます。レビュー１大好き。レビュー５は絶対見ないし。サクラだと思うし。

田中：　よく今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか。

加藤：　大切。従業員がひとりしかいないんですけど、彼の存在ですね。彼がいなかったら、もうぼくこんなことしとれんし。よく働いてくれますよ。びっくりしちゃう。「どうしてぼくについてこれるんだろう？」って。これ読まれたら大変ですけどね。

田中：　あははは。読んでもらって下さい（笑）

加藤：　いやいや（笑）　まぁ、僕の名前検索する人はそうそういないと思うんで。ほんと頑張ってますよね、文句も言わず。すごいと思う。エアー工房さんを背負ってるのは、彼です。ぼくじゃないもん（笑）

田中：　ぷ。

加藤：　確かに応援とか、協力業者さんとか呼んで取りまとめしてやってますが。立派です。彼が事故でもしたら大変。

田中：　ふふふ。
　今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったら教えてください。

加藤：　年表作りたいと思いましたね。うん。見渡す手帳はあるんだけど、ほんと要しか書いてないので。思い出したら、書きたいね。誰に見せるわけじゃないけど。その鬱っていうか、嫌な時を鮮明に思い出して、「違う振る舞いが出来んかな」って、それは思ったな。もー、これはちょっと、脳みそが大変です。

田中：　今？

加藤：　うん。汗かいてる、変な。自分ブレーンストーミングだね、これは。４５年間でしょ。ほんとはもっとあれなんですよね。今は、そうなんだよな。ごめんなさい。今ひとりで納得してるけど。大事なことはいっぱいあってね。それ書いとかないかんな。きっとまた同じことが起きちゃう。

田中：　私の仕事はコーチングだったりするんだけど、結構こういう時間だったりする。自分を振りかえったりだとか。

加藤：　ああ。

田中：　案外自分がやってきたことを忘れてたりしてる。だから後で思い出した時「あれがターニングポイントだったな」「おれ、頑張った」とか見えたりすると、次の行動とかにつながってきたりするんだよね。

加藤：　そうですね。

田中：　クライアントさん、そういう時間に使ってるかな。喜代一さん、人間観察とか興味があるっておっしゃってたけど。まわりを見る時に基準となるのは自分だったりするから。

加藤：　そうだね。

田中：　見るためには物差しが必要で。その物差しは自分で作らないとね。それがないと見てても分からないというか。

加藤：　そうだね、そうだね。物差しがいっぱいあるんだね、おれ、きっと。「ここ、こうじゃなくちゃいけない」っていうのがいっぱいあるもんで、笑っちゃうんだろうね。あー、そうかぁ。けどねぇ、親のいざこざもあるのであんまり思い出したくないのもあるのね。

田中：　うん。

加藤：　思い出したくないし、うちの子には関係ないこともいろいろあるもんで。けど自分自身には必要だから、ほんとやった方がいいんだろうね、こういうことは。だもんで、３０年ぶりぐらいに父のところに、行ってみたいなって思いますけど。これこそ、泣いちゃうと思う、たぶん。「すみませんでした」か。「ありがとうございました」って泣いちゃうかもしれん。

田中：　わかんないけどね、行ってみないと。

加藤：　あはははははは。うん（笑）　まぁ、けど、悪いことはないと思うな。

田中：　それ、準備が出来ないと、そういうことすら思い浮かばない気がする。

加藤：　うん。けどこれ朝ふと思って出かけちゃうことが出来るくらい行動力いるんだけど、今は。大人だから、電話一本で「今からちょっと九州行ってくるわ」とか。

田中：　いつでも、行けるよね。

加藤：　うん。いつでも出来るなと思って、やってない。さっきの禁煙パターンと一緒で。いつ

でも出来ると思ってるんですよ。行くきっかけを探すのも、たぶん自分の言い訳があるんだけど。けど、今から行ってもいいなって。金あるし、行き方知ってるし。もう一回生まれたところに行ってみたいなって。

田中：　全然帰ってらっしゃらないの？

加藤：　帰る必要ないんですよ、ぼくは。本籍はこっちになってるし。前の親父は風の噂では死んでるんだけど、その墓に行くのも家族には全く関係のないことなのね。子供たちは知らんでいいことだし。けど自分のけじめとしては難しいですよ。これは自分だけのこだわり。表向きは全部「義父側の加藤ちゃん」で、こっちは（旧姓側）は暗かったんだけどね。「加藤ちゃん」じゃないと今の加藤ちゃんはいないし。ここにこだわる自分は馬鹿だと思ってるし。ただ礼儀として行かないかんのかなって。もう観光地化してるみたいだけど、対馬は。

田中：　そう。

加藤：　うーん……。

田中：　喜代一さん、今日はね、ほんとありがとうございました。

加藤：　いえいえ。こちらこそ。絶対支離滅裂だと思うわぁ。

田中：　あはははは。

加藤：　「なに言っとるだ、こいつ」ってなると思うわぁ。安形くんのよりひどいと思うわぁ。安形くんの、読んでて笑ったもん、おれ（笑）　「おもしろいなぁ、この人」と思って（笑）獣医の先生のもおもしろかったし、喜多山さんのもおもしろかったし。大志朗さんも。みんなおもしろいね。やっぱおもしろいわ。安形くん、最高だった。この間会った時に「飛行機作ってたのぉ！？」「知らんかったなぁ」って。「最高におもしろかったよ。でれ笑った」って。「そうですかー」って（笑）

田中：　あはははは。

加藤：　おれ、加筆修正するわ。

田中：　あんまり修正しないで（笑）

加藤：　あはははは。

田中：　あれね、ほんとに基本しゃべりのまんまなの。

加藤：　すごいね。まぁ、そっちのがいいかもしれんね。

田中：　うん。その方がおもしろいと思う。今日はどうもありがとうございました！

最後までお読みいただきましてありがとうございました。

今回、あなたの心の内側では、どのような気づきがありましたか。
少しでもみなさまのお役に立てましたら幸いです。

さて、私にはこのインタビュー記事の電子書籍出版のほかに、
『コーチング』　という専門職の顔も持っています。
実は、今お読みになられたインタビューそのものも、このコーチングの考え方に則って行っています。

コーチングとは、人材開発のための手法のひとつで、
おもに対話によって相手の自己実現や目標達成を図る体系的な技術のことです。

相手の話を聴き、感じたことを伝えて承認し、相手に適切な質問をすることで、
クライアントの自発的な行動を促していくことができます。

日本にはいくつかのコーチングスクールがあります。私はCTIというコーチングスクールでCPCC（Certified Professional Co-Active Coach）という国際資格を取得しています。現在、日本では約550人のコーチがCPCCの資格を取得し、世界中では6,900人のコーチがこの資格を持って活躍しています。（2014年6月現在）

また、『人間の脳の取り扱い説明書』とも称される実践心理学　『NLP（神経言語プログラム）』　も学び、
米国NLP協会認定トレーナーアソシエイトの国際資格も取得しています。
このNLPとコーチングはとても親和性が高く、相互に相乗効果を発揮して、クライアント様の変化変容、
目標実現に大きく寄与していると評価を頂戴しています。

その他、ソースワークショップトレーナーの資格も取得しており、クライアント様に
　「本当に生き甲斐のある人生とは何か」　を見定めていただくためのサポートもさせていただいております。

しばらく新規クライアント様の募集は諸事情によりおやすみをさせていただいておりましたが、
このたび、また新規クライアント様の募集を再開させていただくことになりました。

もし、少しでもご興味やご関心がおありでしたら、無料体験コーチングを受講なさってみませんか。
今なら１回６０分のコーチングセッションを無料でお受けしております。

これまでも、たくさんの経営者様、事業家様、サラリーマンの方、もちろん主婦の方々までコーチングをさせていただきました。　柔軟なアプローチと揺るぎない信頼関係。　これが私のコーチングのスタイルです。

あなたの目標達成はもちろん、日常生活でのメンタル調整に、思考や判断の整理に、コーチングやNLPは素晴らしい効果を発揮します。　私にあなたのサポートをさせていただけるのであれば、これに優る喜びはありません。　あなたからのお問い合わせを心からお待ちしています。

無料コーチングセッション、その他のお問い合わせはお気軽にこちらから。

＜　ace-support@samba.ocn.ne.jp　＞

最後までお読みいただきましてまことにありがとうございました。

ハタラクヒトペディア電子出版
記者兼編集長　田中永子

ハタラクヒト＊ペディア　22 < 加藤喜代一 氏 >

http://p.booklog.jp/book/88333

著者：田中永子
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/24riko/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/88333

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/88333

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ